

2026 年 10 月 4 日聖霊降臨後第 19 主日 (マタイ 21:33~43)

そこで最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。

(マタイによる福音書 21 章 37 節)

先週からマタイによる福音書の 21 章に入っています。この章の初めにはとても印象的な記事が載せられています。まず 21 章 1 節からは「エルサレムに迎えらるる」、12 節からは「神殿から商人を追い出す」。そして「いちじくの木を呪う」、「権威についての問答」と続いていくのですが、ここで心に留めておきたいのは、イエス様はこのとき、すでにエルサレムに入っておられたということです。

エルサレムは当時の宗教の中心地であり、エルサレム神殿が建っていた場所です。そしてイエス様が三度、ご自分の受難予告の中で語った場所にあたります。この予告があって、エルサレムに入って、そして案の定、腐敗した神殿の様子を見て心を痛み、神殿から商人を追い出したイエス様。ぶどう園を任されたはずなのに、その収穫をおこなうどころか自分勝手に生きる人々の姿がそこにはありました。

ということはこのぶどう園の話は、神の国、神殿、教会、そのようなもののことを語られているということになるのだらうと思います。わたしたちの教会は果たしてどうなのか、そのような思いでイエス様のたとえに耳を傾けてみましょう。

イエス様はこのようなお話をされました。あるところにぶどう園を作った人がいました。その主人はそのぶどう園を農夫たちに貸し、旅に出たそうです。つまり土地もぶどう園もすべてそ

の主人のものだということです。収穫のときが来ました。主人はその収穫を受け取ろうとします。ところが農夫たちはそれを拒否するのです。暑い時も寒い時も、ぶどうの世話をしたのは自分たちだ。だからぶどうを渡すのは嫌だ。一見すると、何だか正しいことを言っているようにも思えます。確かに汗をかき、手を動かしたのは農夫たちです。ある解説書を読むと、「これは資本主義による搾取の例だ」とまで書かれていました。しかし聖書には書かれていないものの、農夫にはきちんと報酬が払われていたことでしょう。ぶどう園での労働についている彼らは、日々安心して生きることができたはずです。

さて、先ほど言いましたとおり、このぶどう園は神の国であり、神殿であり、教会です。それらに共通していること、それはその主人は「神さま」だということです。神さまが作られ、建てられたものだということです。

何年か前、あるカトリックの神父さんのお話を聞く機会が与えられました。わたしたち夫婦はその神父さんに大きな感銘を受け、神学生ときには東京まで行ってその方が司牧している教会で礼拝に参加したこともあります。その方はこんなことを言われました。教会ってなんだろうって。あるところに二つの教会が並んでいました。一つの建物は天にそびえるような塔で、そのてっぺんには大きな十字架がついていました。しかしその立派な建物には人はあまり集わず、いつも牧師が一人で祈りをささげていたそうです。一方もう一つの建物は、お世辞にも立派なものではなかったものの、そこにはたくさんの人が出入りし、感謝の祈りと賛美の歌声であふれていた。あるときイエス様がその場所にやってきたそうです。

最初に目に入ったのは、立派な建物。でもイエス様は首をかし

げます。「何だろうここは。何であの人、一人で祈っているんだろう。それよりあの塔のてっぺんに付いている物。あれって僕が殺されるときにつけられた十字架の形をしているぞ。なんであんなものをつけているんだろう」。続いて隣の建物に目をやります。「何だ、ここは。みんなニコニコしているぞ。歌声も神さまに届いているようだ。楽しそうだなあ。よし、僕も一緒にいよう」。そう言ってイエス様はその建物に入ってしまったというお話です。

もう何年も前に聞いた話で、内容もうろ覚えです。またそのときには「教会って建物ではない」というような趣旨だったようにも思います。ただこの話が、強烈に心に残っているんですね。

主人にぶどう園を任せられた農夫たちは、その収穫を渡すことを拒みました。最初に来た僕を一人は袋叩きにし、一人は殺し、さらに一人は石で打ち殺したそうです。この場所は自分たちの物だ。この収穫は自分たちの手柄だ。この実りは自分たちの手で得たものだ。その思いが彼らをこのような行動に向かわせたのでしょう。このぶどう園の主人はきっと、いきどおったことでしょう。これが現実の社会のお話であれば、主人はぶどう園の農夫たちを解雇し、力づくでぶどう園の経営を奪い返したことだと思います。しかしこれは、神の国のたとえです。神さまだったらこのときどうするのか、ということなのです。イエス様は続けます。そのぶどう園の主人は、「わたしの息子なら敬ってくれるだろう」と自分の息子を送るのです。言うまでもなく、神さまがイエス様をわたしたちの間に送られた、そのことが言われています。そしてその跡取りである息子、イエス様をも農夫たちは殺してしまうと、イエス様は言われているのです。

まずここに、神さまの愛が込められています。自分が送った僕を袋叩きにしたり殺したり、そのような場所に同じように息子

を送ったところで、ひどい目に合うのは目に見えています。でもぶどう園の農夫たちに、自分たちは神さまにすべての物を備えていただき、生かされていることを分かって欲しい、その思いで愛する独り子を遣わされたのです。

その愛をわたしたちは知りながら、受け入れることがなかなかできない。自分の力で生き、自分の力ですべてを得たと勘違いしてしまいます。恵みを独り占めしてしまい、神さまにその喜びをお返しすることを怠ったとき、わたしたちはこのぶどう園の農夫と同じようになってしまうのではないのでしょうか。

さてイエス様は続けて、旧約聖書の言葉を語られます。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える」。「隅の親石」、これが大事なのです。「隅の親石」とは、建物全体を支える最も大事な石のことです。教会のそのかなめ石がイエス様でなかったとしたら、教会という名前がついていたとしても、それは教会ではありません。しかしわたしたちがイエス様の名によって祈り、神さまに栄光を帰すときに、そこにたとえ建物がなかったとしても、そこは教会、豊かな実りを結ぶぶどう園となるのです。そこは喜びであふれる、素晴らしい場所とされるのです。

わたしたちの教会は、どうでしょうか。先日の信徒の集いではたくさんの人たちが集まり、神さまからのラブレターを聞き、神さまにラブソングをお返ししました。この「神さま」という言葉が大切なのです。神さまの名によって祈り、賛美をするからこそ、神さまはその業を喜ばれるのです。ぶどうの収穫を神さまと共に喜ぶ。そしてイエス様と共に、感謝と喜びの食卓を囲む。そのような教会でありますように、「すべてのものは主の賜物」、その言葉をいつも心に刻みながら歩んでまいりましょう。